

言葉の秘密の 守り人（2）

だました心とだまされなかった心



上村ひでみ

昔...昔

ある国の ある村の 小高い丘の上に 仲良し家族が 暮らしていました

朝早くから 仕事に出かけ 夜遅くに 帰ってくる 働き者のお父さん

お父さんよりも 早くから 起きて 一日中 家を守っている 優しいお母さん

よく 笑い よく 泣き よく 食べて よく 遊ぶ やんちゃで 素直な 双子の 女の子

そして 白い 大きな 犬

お父さんは

お仕事以外の 大切な お役目がありました

それは ...使命... といったたぐいの お仕事でした

お父さんは 魔法の秘密を 守り 伝えていく 一族の 1 人でした

それは 代々伝えられている 大切に 繊細な 秘密でした

たくさんに 分けられた その 魔法の一つ

「言葉に秘められた 魔法」を

お父さんは 守り 幼い 双子の娘に 「おとぎ話」という形で 丁寧に 伝えているのです

魔法は 力があります

言葉に 魔法が込められるとき

それは 人の 勇気となります

無限大の 愛の扉が 開かれたりもします

また 権力や 争いへと 形をかえることも 可能です

ありのまま つたえることが 可能だった はるかかなた 昔...

人間は もうすこし 光に近い 存在でした

今は 大地に 近い存在として いきているので ありのまま 伝えると うまくいきません

大人達は いくつかの 「恐れ」 を持っています

大人達は 己の 恐れに たいして それぞれの 体験から 導き出した ...タイトル...をつけています

「常識」

「みんなと同じ」 「正当」

「正義」

「裁く」

言葉の秘密に関する 話しを すると 必ず 大人達は それぞれの 「恐れ」 から生まれた 思いを 総動員して その 言葉を 怖がります

表向きは 怖がっている様子は みせません

あくまでも 笑顔で 「言葉」 に 善悪の判断を下します

「言葉」 は 本来

ただの 「音」 として 存在していました

それは ただ あるがままに ただよっていました

そこに 光が あたり喜びという 形をはおり 思いを 伝える ために 人間の口から 発せられるようになりしました

「重み」 を伴うようになりしました

人間の口から 発せられるようになった その音は 「言葉」 といわれるようになりしました

人間とは 感情という 素晴らしい エネルギーを 自由に 使える者です

そして 言葉には その 感情が 自由に 使われ 加わります

だから 同じ 言葉であっても 使う人間によって その 言葉の 「 重みや 雰囲気」 は ずいぶん違いました

「おはよう」でも その言葉に 「 大好き」の感情をいれるのと 「 大嫌い」の感情をいれるのとでは まったくちがう 言葉として 相手に 伝わります

いつしか

人間が 心と心で 話をしない 時代に、はいつた頃から 言葉は 人間にとって ただならぬ アイテムになってきました

言葉に込める 感情は 自由です

だからこそ 自分は どんな ふうに言葉を 使いたいのかを よ〜く 感じる事が 大切なんです

お父さんたちの 一族は 昔...から 国を 守り 民を導く 王様とともに 働いていました

王様は その立场上 言葉を 丁寧に 吟味しなければ なりません

立場が「 統べるもの」である以上言葉に重い 責任が ともなうのは 当たり前なことでした

お父さんたち一族は 王様が 使う 言葉を いつも、 よりすぐりました

王様の 思いが もっとも 込められるような 言葉を選び

また力を伴う 言葉を使うからには それにふさわしい 思いを 会得しなければならないということも つたえました

力のある 「 言葉」 を使う時 人間は その 言葉の 力に 負けない 思いを もたなくては 「 言葉」 に 振り回されたり... 「 言葉」 が 一人歩きしたり 力を持たなくなります。

「言葉」に相応しい人間としての体験が必要なのです。
また、思いの強さが必要なのです。

それなくして王様の言葉だけをただ真似してもそれはただの王様ごっこでしかないのです。

お父さんの一族は言葉に魔法をかけました。

そして王様は その魔法の言葉を使い

民を守り 国を豊かに していききました
やがて 何世代も 続いた 平和が バランスを くずしはじめました。

人間の「恐れ」が産んだ「執着」が「我欲」を生み出し 人間は 互いの 違いを 個性としてで
はなく 排除しなければ ならないものとして 扱うよう になりました。

そして「魔法の言葉」は

守り導き 豊かになる 為ではなく

戦いに 勝つために 使われるよう になりました。

一族は 勢力争いにあい たくさんの 命が 奪われました。

人間は 武器を使い 恐怖で 人間を 無理やり 支配するよう になりました

やがて

魔法を使う一族は そんな人間からは 恐れられるようになり 忌み嫌われ 迫害されるようになりま
した。

魔法は やがて
隠されていく ようになりました。

いくつかに
分けられ
それぞれの一族は
「おとぎ話」という形でそれぞれの魔法を伝えていきました。

魔法を、知らない人たちの中で気づかれないようにひっそりと暮らすようになりました。
いつの日か...

やってくるはずの...
約束の日の為に...

今日は一日中 雨です ...

いつもの森で 小雨降る中

仲間達と ♪雨 雨 ダンス♪ を 目一杯 楽しんだ 双子達は、大好きな お父さんの 帰りを 白い 大きな犬さんに 抱きつきながら、今か今かと 待っていました...

「お父さん、もうすぐだよねえ～」
「うん～ もうすぐだよねえ～」

o(^^o)(o^^)oきゃっきゃっ ♪♪♪

つづく...

きゃあきゃあ はしゃぐ 娘達の 側には 白い犬さんが いました。
無邪気な 天使達を、守るように 深くて 黒い目で じっと二人を 見つめています。

「お父さんは... いつもより 少しばかり のんびりと 帰ってくるわねえ...
雨ですからねえ (*^_^*)」

優しい お母さんが 笑顔で 二人に 言いました。

双子は

そっかあ～ (^～^)

と言い 「じゃあねえ～ こないだ お父さんが 教えてくれた ...あれ... やろうかああ」

「...あれ... やるやるう～」
(ノ^^)八(^^)/

と はしゃぎはじめました。

「マリー 私は マリーが 大好きですよ... 産まれてきてくれて ありがとう～
(≧▽≦)」

「きゃあきゃあ～
もじもじしちゃうう～
ヅ(≧▽≦*)> あはあはあはあは～」

「じゃあ 今度は あたしねえ～ (^O^)/」

「ベティー 私は ベティーが 大好きだよ ～ 産まれてきてくれて ありがとう～ 会えてとっても 嬉しいよ～
(^ε^)」

「うきゃきゃきゃ～
くしゅぐったいよ～
ヅ(≧▽≦*)> きゃはきゃはあ」

双子は 大はしゃぎで 白い犬さんに 抱きつきました～

「ジョン～ だあいすきい～
産まれてきてくれてありがとうねえ～
うちに 来てくれて ありがとうねえ～
ずっと一緒に いてくださあい～
ちゃんとお世話しまあす～」

「しまあ～す
(ノ^^)八(^^)ノ きゃあきゃあ～」

双子達は お父さんから つい 最近 新しい 言葉の 秘密を 教えてもらいました。

それは 言葉にするたびに 全身が くすぐったくなるような 言葉なのです。

お父さんは
まず 伝えたい人の 名前を はっきり 発音するようにと 言いました。

名前という 音には 人間の魂が 宿るらしいのです。

だから 必ず はっきりと 発音します。

そして 出来れば 斜め 前くらいから 少し 首を 傾けて そっと 目を見て
「大好きです」 と 言うのです...

その時 本当に 大好きなら 体が くすぐったくなるよ ... と お父さんが 言いました

二人は 互いに 言い合うたびに もう くすぐったくて たまりません...

お母さんには いつも いつも 言われていたし
そのたびに
「私も お母さんが だあいすきい～」と いいなれていたのもう くすぐったくなりませんでした。

お父さんも 同じでした

森の 仲間にも 言ってみました。

仲間達はそれぞれ違う反応がありました。

リスさん達は

「大好き」というとクルクルと自分達の周りを走り回りました。

小熊さん達はいつもよりたくさん木の実を木から落としてくれました

みいんなんだかとても嬉し恥ずかしい様子でした...

お父さんは

「大好き」という言葉はもっとも美しい言葉の一つなんだよ」と言いました

そして

「大好きと口に出したときと言われたときの自分の気持ちをよく心に刻みなさい...

そしてね

優しい娘達よ...

すべての言葉の中に「大好き」を添わせなさい...

そっとだよ...

相手に気づかれないようにそっと寄り添うように込めなさい...

お前たちにはそれができるんだよ

お前たちは「言葉の秘密の守り人」なんだからね...

「おはよう」や「ありがとう」や「ごめんなさい」

すべてに「大好き」を込めるんだよ

それはね 贈り物にリボンを丁寧にかけるのと同じなんだよ。

手間暇をかけながら 心を染み込ませた お母さんの 料理が おいしいように

「大好き」を 染み込ませた 言葉が 人を 幸せな 気持ちに させるんだよ

どんな 言葉でも 心を込めて 差し出すとき

それは かけがえのない 贈り物に なるんだよ...

「魔法とはね 人が 人に 伝える 贈り物のことなのだよ」

(*^_^*)

... と

たくさんの 難しい お話しは わからなかった 双子ですが

「大好き」という 言葉が 大好きなので ♪

お父さんの 言うように たくさん たくさん 使いました

そうして 遊んでいるうちに

やっと お父さんが 帰ってきました ♪

\(^_^)/

「お父さ～ん おかえりー おつかれしゃまぁ～～～」

ヾ(≧▽≦*)> ヾ(≧▽≦*)>

二人は 足を バタバタさせて はしゃぎました

「ただいま～ 可愛い 娘達 ♪

今日も たくさん くすぐったくなかったかな？」

「なったあ～」

「なったあ～」

o(^^o)(o^^)o

「よしよし～ さすが 我が娘達だね
さてでは そろそろ 新しい お話しを はじめようかねえ...
聞きたいかな？」

「はあ～(^-^)/い
はあ～(^O^)/い」

「では 話そう

騙す心と 騙されない心 ...」

つづく...

昔...昔...

たいそう 活気のある 小さな 町がありました。

男達は よく 働き
よく 遊びました

女達は そんな 男達の 面倒をよくみながら 家庭を しっかりと 守りました

いろんな 商店が並ぶ通りがありました。

その中には 食べ物や 日常の 細々した生活に必要な物などを 売る 小さなお店がありました。

正直で 信心深い 夫婦と 息子が 細々と 商いをしながら 仲良く暮らしていました。

息子は 産まれた時に とても 小さくて 手のひらに 乗るくらいでした。

しばらく 息を しなかった為... 少し 体や 他の いろんな ところが 人より 弱く 育ちました。

そのぶん 心が 優しく 小さな 命を 大切にできるように育ちました。

両親は みんなとは 違う 息子を 不憫に 感じていた時もありましたが... 毎日の 暮らしの中での 息子の 優しさは 他の 誰にも 変えられない 素晴らしいものだといつしか 気付くようになりました。

いつしか 不憫な思いよりも

自慢の 息子だ

と 思えるようになりました。

お店番に たってもらうようにもなりました。

息子が ただ 生きていてくれるだけで

両親は もう じゅうぶん ありがたいと思っています。

息子は 数を 数えるのが あまり 得意ではありませんし

お金は おつりが よく わかりません

だから おなじみさんには つけに してもらい まとめて 両親が 集金します。

おなじみではないときは

会計の時だけ 両親が お店に 顔をだします。

それでも すこし 会計が あわないときも ありますが...

両親は 「まあ いいかっ 」 と 笑ってくれています。

息子は

欲...というものが まったく ありません。

何かが ほしいとか 言ったことが ありません。

両親が 買うものや こさえてくれるものが ただ 嬉しくて...

いつも 笑顔で

「 ありがとう (=^▽^=) 」 と 言いました。

だから 両親は 会計が あわないときは

息子が 買い物をしたと 思うことに しました。

そうして 毎日を 仲良く 暮らしていました。

活気のある町なので いろんな 町から 新しく いろんな 人が やってきます。

短い 間ですが 暮らす 人も います。

ある日...

両親と息子は一緒に お店に いました。

13歳くらいの 男の子が ひとりで お店に 入ってきました。

手に 紙をもっていました。

「ここに 書いてあるもの である物を全部 下さい。」と いました。

おつかいに来たようでした。

最近 町に 仕事でやってきた 家族かなあと 両親は 思いました。

たくさんの 買い物だったので 息子が 荷物を 一緒にもって いくことになりました。

息子は 男の子にたずねました...

「あなたは たいそう 小さいですが 何歳なんですか？」

「13歳に なったとこ。」

男の子は 少し ぶっきらぼうに 答えました。

「こんなに たくさんの 買い物 大変だね。 家族が たくさんいるんだねえ...

お手伝い偉いねえ...(*^-^)

「お手伝いじゃない。 仕事だよ。」

男の子は ますます ぶっきらぼうに 答えました。

「えっ お手伝いが 仕事 なの？」

お父さんから お給料を 頂いているのかなあ？」

「お父さんなんかは 初めから いない。」

息子は なんだか わけがわからなくなり 聞くのを やめてしまいました。

男の子は うつむいたまま もくもくと歩きました。

町の 外れには 短い間 暮らす 人たちのための アパートがありました。

その アパートの前に 大人が 沢山いました。

「ちゃんと 買ってこれたのか～」

少し 赤い顔をして 髭が 目立つ 荒っぽい感じの 大人達が タバコを 吸いながら、 男の子の 買い物袋を ひったくりました。

息子をみて

「こいつは 誰だ」と 男の子に 聞きました。

「お店の 人... 重いからって... 来てくれた...」

「なにが 重いもんか～
怠けたこと いうてると 承知しねえぞ
このチビ」

「金渡しな ごまかしてないだろうなあ～ 足りなかったら わかってるだろうなあ～」

荒っぽい大人は お金を 数えました。

そして「ふんっ」といって 買ったばかりの 食べ物の中から 自分の 好きなものをつかんで むしゃむしゃ 食べ始めました。

もう 目の前の 男の子など まるで いないかのような 様子でした...

息子は 男の子をみました。

男の子は うつむいていました。

両手で 上着の 裾を 指で つまんで ただ じっと その場にたっていました。

息子は 男の子の 顔の そばまで 自分の 顔を 下げてから そっと 言いました。

「今日は 買い物してくれて ありがとう。一緒に 歩いて 楽しかったよ。また おいでね。(*^_^*)
じゃあ さようなら。」

男の子は 一瞬 びくっと しました。そして 目を 大きく開き 何か いいかけましたが ...

言葉に ならなかったようで...

また 下を 向きました。

お店に帰り... 息子は その事を 両親に 話しました。

「そうかあ... また あの アパートに そういう 人たちが 来たんだねえ...
ほら 今 教会の 修理が 始まっているだろう... おそらく その 人たちは その修理に きた 人たちなん
だね...
中にはね... 小さな 子どもたちが 必ず 何人か いるんだよね...
可哀想に... 」

と お父さんが なんとも 悲しそうな 顔をして 言いました。

「そうですよね...
子沢山で 食べさせてあげられなくなって... 小さな時に 売られてしまった 子どもたちらしいで
すね...
親御さんにしたら どんなに 切ないでしょうねえ...
子どもたちも どんな 扱いを うけているんでしょうねえ... 」

両親の 話しを 聞いていたら 自分も 切なくなってきました...

あの うつむいて
「お父さんなんて 初めからいない... 」と いていた 男の子の 可愛い目を 思い出しました。

ほんとうに 初めから お父さんが いないのかなあ...

そうだったら イヤだなあ...

お母さんは いるのかなあ...

夜は いい夢みれるのかなあ...

また 来てくれたら いいなあ...

息子は いつのまにか すっかり 眠たくなりました ...

☆☆☆☆☆☆☆☆

おやおや 双子たちも なにやら ゆらゆらし始めました...

お父さんと
お母さんは

一人ずつ 娘を 抱っこして ベッドに そっと 下ろしました。

下の娘 ベティーは すっかり 瞼がとじています

小さな お手手は いつも お花の 形に 可愛く ひらいています

その手のひらの中に 自分の ぐーの手を いれて いつものように 上の娘 マリーは すやすやと 夢の世界に入り始めました。

お父さんは 双子たちの 寝顔を しばらく みながら お母さんに 言いました。

「この子達には まだ この お話しは 早すぎると 思うかい？」

「いいえ... この子達は 理解すると思いますよ...

お父さんの 選ぶ お話しは いつだって ちょうど いいですよ。」

つづく

ベティーは 夢を見ていました...

もちろん 夢を見ているなんて 気付いていません

ベティーは 知らない街に たっていました ...

人が 沢山いました。 なんだか 心が ザワザワしてきました ...

お姉ちゃんを 探してみました

なぜなら いつだって 二人は 一緒にいるからでした

よく 探してみたら

お姉ちゃんは 小さな小屋の前で 白い犬の ジョンと いました。 ベティーは 嬉しくなって 駆け寄りました。

お姉ちゃんは ベティーを見て おいでおいでをして 手を きゅっと 握ってくれたので ベティーは とても 心が 落ち着きました。

「何しているの？ マリー」

「うん、 この小屋の中にはね 小さな 子どもばかりが いるんだよ。

小さな 小さな 子どもがね 熱を出してるみたいなんだあ...

みんなでお世話しているよ... ほら」

と ドアの 隙間から 見える様子を ベティーも 見ってみました

小さな 窓から 差し込む 薄暗い 板張りの 粗末な 部屋に 小さな 子どもたちばかりが 沢山いました。 お布団が 隅っこに きちんと 畳まれていましたが

一人だけ お布団に 寝ていました

赤い顔をして 息が 苦しそうでした

「お母さんに 教えてあげようかあ...」 ベティーは マリーに 言いました。

「うん お母さんなら すぐ お薬 こさえてくれるし おでこに ひんやりした タオル乗せてくれる しねえ～」

二人が そう話していると もう一つの 大きいドアが バタンと あきました。

体の 大きな 大人が 入ってきました

二人は よかったあ これで 小さい 子どもは お世話してもらえるね～と思いました。

大きな 大人は チラッと 寝込んでいる 子どもの 顔をみて
「ちっ」と 一言 いいました...

そして

「朝飯 食べたかったら 働きに 出な
こないやつには 飯は やらねえ～」

そうやって また バタンと ドアをあけて 行ってしまいました。

双子たちは なにが 起きたのか まったく 理解できませんでした
とにかく 胸が ドキドキしてきました

二人は ジョンに 顔をうずめていたくなりました

そうしていたら 涙が 出てきました...

うわあ～ん (ノ_・。)

うえ～ん (|||_|||)

いつの間にか 二人は ベッドの上で 泣きじゃくっていました。

お母さんと お父さんが すぐに 二人を 抱っこしてくれました。

「 どうしたのかなあ... なにが 悲しいのかなあ...

お父さんに 話してもらえるかなあ... 」

ひとしきり 泣き終わり ベティーは お父さんに 夢の 話しを しました。

「 また 二人とも 同じ 夢の国に 出かけていたんだね...

一緒に 悲しい 世界を 知ってしまったんだねえ...

優しい娘達よ

お前たちは 私たちが 神様から 預けて頂いた 素晴らしい 宝なんだよ

そしてね

世界中の 子どもたちも また かけがえのない 宝 なんだよ...

だけどね

子どもたちが 宝 だとは 知らない大人が 世の中には 沢山いるんだよ

だからね 大切な 宝をね

大切に できないんだよ

悲しいことだね... 」

「 お父さん 魔法の言葉を 教えてあげてよ～

あの 小さい子どもたちが 可哀想なんだも～ん

うわあーん

(ノ_・。)」

ベティーは また 泣き出しました。

「優しい娘だね... ありがとう」

「あのね...

宝物をね 命 だと しらない 大人にはね 魔法は きかないんだよ

宝物がね お金 だと 勘違いしている大人達にはね

魔法はね 毒にしかないんだよ

その毒はね 大人達を どんどん 荒っぽくしていくんだよ

悲しいね」

「お父さん

じゃあ どうしたら あの 小さい子どもを 助けてあげれるのかなあ？」

「お前は 助けてあげたいと おもったのかい？」

「うん (ρ_-)o」

「ありがとう マリー

人はね 人である限り みんな...

自分にしかできないことを 持っているんだよ

誰とも 比べられない 自分にしか できないこと

それは 誰かに 教えてもらっては いけないんだよ

自分で 探さなきゃ その 何かは 力を 失うんだよ

さあ マリー お前も それが 何かを 探して ござん

そして それが 見つかったら その子を 助けに 行きなさい」

お父さんは そういうと 優しく 頭を 撫でて くれました...

二人は また 眠く なって きました

朝... 目が 覚めたら もう お父さんは お仕事に 出かけて いました

双子は 両手を 上げて
伸び伸び〜と 伸びて いつも どおり
ぴょ〜んと 飛び 起きました

今朝は お母さんが 卵と 蜂蜜を入れた パンを 焼いて くれました

二人は それを 食べたら なんだか 元気も りも りに なって きました 〜

今日も お母さんのお手伝いを ちょちょっと 済ませて

元気に 森に 出かけました

元気に 歩いて いつもの 風の ベールを 抜けました

そして ふわふわの 枯れ葉を さわっと 踏みしめました

そのとたん

すごい痛みを二人は感じました

「きゃあ～＼(＞_＜、)＼痛いよ～

マリー」

「うん痛いね ベティー 大丈夫？」

二人は手をつなぎながら頑張って大きな木に向かってあるきました

その途中でその痛みのわけがわかりました

大好きな森の仲間

リスさんが血だらけで倒れていました

リスさんのお腹には誰かが森に捨てていった古い壊れた鎌が刺さっていました...

リスさんはそれを取ろうと頑張って動きました

動けば動くほど鎌はリスさんを傷つけました

すでにリスさんの周りには沢山の仲間が集まっていた

みんな泣きながらそばにいました

二人もみんなと同じでした

なぜならリスさんは苦しげに痛みに耐えていました

もう体から流れる血もわずかしかなかったようでした

ベティーは泣きながらふらふらとリスさんに近づきました

そしてリスさんを膝の上に抱きました

みんなはそのまわりに集まりました

マリーは 祈りました

頭が ぼんやりするくらい 祈りました

元気に クルクル走り回る リスさんを 心に 描きながら 祈りました

みんなが 「わあわあ」 叫びました

なにが 起きたのかと マリーは 目をあけました

すると 体に 刺さっていた 鎌が いつのまにか するりと 抜けおちたのです
二人はいそいで 大きな ナプキンを リスさんの 体に巻きました

そして 胸に しっかりと リスさんを抱いて お母さんのいる 家に 走りました

バケツは 森に ほったらかしです

お母さんは リスさんに 血止めの お薬を 塗りました

「 不思議だわあ どれくらい 長く 鎌が 刺さっていたのかしら 傷口に あるはずの 化膿が ないわあ
これなら すぐによくなるわ」

ベティーとマリーは森での 出来事を 慌てながら お母さんに 話しました

お母さんは 全部 聞き終わった後に
深い 眼差しで マリーを 見ました

そして 「たくさん 怖い思いをしたのね... お疲れ様でした
さあ お菓子を やいてあげましょうね
体を 洗ってきなさいね」

お母さんは

お薬を しまってある 納屋に いました

そして 小さな窓に こしらえてある
お母さんの一族の 祭壇に 手を合わせました

「 皆さん 聞いてください...

私たちの 愛しい娘 マリーは 私たち一族の 血をひいています

あの子の 力は 目を覚まし始めました

どうか 見守ってあげてください... 」

その祭壇には 秘密の 言葉が 刻まれていました

そこには

「 命の秘密の守り人 」と書いてありました...

お母さんは

命の秘密の守り人の一族なのでした

病気の意味 を 知り癒やす方法を知り
草や石や 水と会話をし 薬を作ります
また 癒やしと再生の祈りを施す 魔法を 伝える 一族なのでした

つづく

いつもより 早めに お父さんが 帰ってきました

明日が お休みの日 だからです

双子は 今夜は たっぷり お話しが 聞けるので ワクワクしています

白い犬の ジョンは ふわふわの 枯れ葉の ベッドの中で まあるくなっている リスさんを見守るように そばにいました。

「さあ お話しの続きが 聞きたいかい？」

「はあい (^O^)/」

「聞きた〜い(^O^)/」

(^_^*) 「では 話そうねえ...」

☆☆☆☆☆☆☆☆

あれから 毎日 男の子は 紙に書いた 食料や いろんなものを 買いに お店にきました。

いつも だいたい 同じような 物を買うので 息子は いつもの 買い物を 袋に 詰めて 待っているようになりました。

そして 息子は いろんな 街に 仕事で 回っている その旅の 話を 男の子から 聞きました。

お店が 暇な時間に 現れてくれるので 一緒にお茶を 飲んだりしました。

初めは オドオドした様子だった 男の子も いつも 変わらない 息子の 笑顔と 優しい 物言いに 固い心が ほどけてきました...

いつものように 買い物に きた その日

お店の 棚にあった 金魚鉢に 手を伸ばしました

そして 足がすべり 鉢ごと 転んでしまいました

鉢は壊れて ガラスが 飛び散りました
男の子は 水浸しです

音を 聞きつけて お店の 奥から 両親が 出てきました

「あらまあ... 大変なこと」 お母さんは 慌てて 男の子に 駆け寄りました
「大丈夫なの？ ガラスで きてないかしら？ あらあら シャツが びしゃびしゃよ
着替えないと 風邪ひくわ

さあ 奥に おいで」

男の子は 叱られると とっさに 思ったので 両腕で 顔や 頭を かばう格好を していました

いつも 失敗を すると 殴られたからです。

お店のお母さんは 優しい 目で そっと 手をひいてくれました。

「後は 大丈夫だよ お父さんと 片付けてしまうからね...
体を 拭いて おいでよ (*^_^)b」

息子に そう言われて 男の子は ほっとしました。

お店の奥には 小さいけれど きちんと 片付いた キッチンと 丸い 木の 大きなテーブルがありま
した。

その 奥には 体を 洗う バスタブがありました

「古い物ばかりでしょ でも 大切に 使うとね まだまだ 役に たつんだよ
さあ ここでね 全部 着替えてね

息子が あんたくらいの 頃に 着ていた服を いくつか もってくるからね
好きなものを 着たらいいからね」

男の子は 久しぶりに お母さんの 香りの する 服を 着ました

あの なつかしい お母さんの 香りが しました

思い出したら 涙が ポロポロ出てきました

男の子には 本当に お父さんは いませんでした

お母さんと 二人だけで 暮らしていました

お母さんは 朝から 夜遅くまで 働いて いました。頼れる家族が 誰もいなかったからです。

風邪をこじらせて あっけなく 天に召されていきました。

お母さんの ことを 思うと いつも 胸が痛くなるので いつもは なるべく 思わないようにしていたのに

なぜだか 今日はお母さんの 顔が すぐに 出てきます

「おや ぴったりだねえ... よかったよ。 あんたの服は ちゃんと 洗って返すからね 心配いらないからね」

さあ 髪をふいてあげようね...

大きな タオルで 髪を 優しく ふいてもらいました

「はい あったかい ココア だよ 温まるよ

風邪ひかしちゃあ 大変だからね」

男の子は カップを両手で 持ちました 口の 下までもってきて 甘い 香りを かいだ とたん

涙が こぼれてしまいました

(|||_|||)

「あらあら ごめんなさいね 暑すぎたかねえ どれどれ 冷ましてあげようねえ

それとも どこか 痛いのかい？」 お店のお母さんは 心配そうに 男の子を 見ていました

片付けを 済ませた 息子が キッチンに入ってきました

男の子と お母さんの 様子をみて

そして 微笑みながら 男の子の そばにいきました。

「お母さんの ココア 思い出したのかい？」

男の子は 泣きながら うなづきました

「そうかい...

涙は 全部だしていいんだよ

全部だしたらねえ あとは いい気持ちになるからね...」

そういつてから 男の子を 抱きしめました

ひとしきり 泣いた男の子は すこし恥ずかしそうな 笑顔で ココアを 飲んで 帰りました。

次の日...

いつも どおり 男の子が 買い物をしに お店に 入ってきました

顔が 少し 腫れていました 痣ができていました

いったいどうしたのかと 息子が 聞くと 「転んだ」と いました。

本当は

違う 服を着て 帰った 男の子を 大人達が 酔っ払って殴ったのでした...

お店のお母さんは 男の子が 可哀想に なりました

洗った服に 手紙を添えて 男の子に渡しました。

「お店で 水浸しになって 服を 着替えたことを ちゃんと 書いたからね ごめんね あんた なんか されたんだろう
本当に なんて 扱いなんだろう」

お母さんは 悔し涙が 出てきました

「僕 転んだだけです

あ... あり...

ありがとう ... おばさん...」

男の子は 下を向いたまま お店の お母さんに そういいました

服の 裾を ぎゅっと つまんだまま...

教会の修理も 終わりました

男の子たちの 仕事も また 別の街へと変わります

旅支度の 為の 最後の 買い物を するために 男の子は お金を 預かりました

「いつもより 大金だからな
落としたら ただじゃおかないぞ
わかったら いけ
このチビ」

以前 預かった お金を 落とした時
恐ろしいくらいの、せっかんを受けました

しばらく 耳が 聞こえなくなりました

思い出したら 体が 震えました...

そしてとうとう もう あの お店の 人たちと お別れするのか... と思うと 悲しくて 切なくて たまら なくなりました

お母さんの 失敗作品だよと クッキーを 食べさせてくれたり

自分には いないからと 数の本を そっと くれたり

傷んだ靴底を 直してくれたり

そして なにより

いつも 笑顔と 優しい 物言いで 丁寧に 自分を 扱ってくれたこと...

お母さんが 天に召されてから 出会った 大人達の 誰も 自分を 丁寧に 扱ってくれたり は しなかつ たのに...

男の子は 胸が 痛くなるくらい お母さん以外の 人を 好きになっていました。

お店には 息子が 一人でいました

「やあ いらっしゃい (=^▽^=)

いつもの 買い物なら 準備しているよ

他にも 何か 必要なあ...」

男の子は 他にいる物が 書いてある 紙を 渡しました

そして もう片方の ポケットに 手を入れて おどろきました。

ポケットに 穴があいていました

預かった お金が なくなっていました

男の子は 全身が 震えてきました

「お金を ... お金を 落としてしまいました ... ごめんなさい

ごめんなさい」

男の子は 頭を抱えて 座り込んでしまいました

「大丈夫だよ

先に 買い物したものを もって帰りなさいよ

でないと 叱られてしまうよ

あとで 探せば お金見つかるよ

さあ 先に もって帰りなさいよ」

息子は 笑顔で 男の子の 肩を 抱きました

「必ず お金を 持ってきますから

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい...」

男の子は 何度も 頭を 下げて 走っていきました ...

つづく...

それから 三年が 過ぎました ...

活気のある町には 相変わらず たくさんの 人が 出たりは いたり 忙しそうに していました。

お店の棚には 新しい 金魚鉢が おかれていました

お母さんと お父さんが 二人で お店に いるとき 若者が 入ってきました

うつむいて 服の裾を ぎゅっと にぎっていました。

やがて 顔をあげました

お母さんは すぐに わかりました

「 ああ あんた あの 金魚鉢の 子だねえ
まあ なんて なつかしいんだろう
まあ よかったよ あんた 元気そうだよ 」

お母さんは 涙ぐみながら 若者を 抱きしめました

「 さあさあ 中に入っておくれ あれから ずっと 息子は あんたを 心配していたんだよ ... さあ 息子に あってやって おくれ... 」

お店の奥の そのまた 奥に 小さな 部屋がありました

その よく 日の当たる 部屋の ベッドに あの なつかしい息子が すっかり 痩せて 眠っていました

「 この子はね
小さい時から みんなより いろんなところが 弱くてね 二年前からは 体が だんだん 動かなくなって きたんだよ ...
少し 動くのにも だいぶ 痛いみたいでね

もう 今じゃ
目も 見えないんだよ ...」

お母さんは 泣いていました

若者は 椅子に腰掛けて あの なつかしい 息子の 顔を じっと みていました
優しい寝顔を みていました

ふと 小さな 丸い テーブルの 上に 白い きれいな 貝殻をみつけました

きれいな 赤いフエルトの上に 飾ってありました

それは 男の子が 海岸の 近くの 教会修理の 仕事の時に 拾った 貝殻でした

いつも 親切にしてもらうばかりで 何も お返しできない男の子が 一番の宝物を 息子に あげたので
した

丁寧に 飾ってくれていたんだ...

若者は 涙が でました

息子 の手を 握り さすりました

すると

「 帰ってきてくれたんだね ... やっとだね
ずっと 待っていたんだよ
大丈夫かい
殴られなかったかなあ...」

と 息子は いいました...

顔が 見えて いないのに なぜ 自分だと わかるのか

若者は 涙で 息子の顔が 見えなくなりました

「僕は皆さんを騙しました
お金を返さずに逃げました

あんなに恩をうけながら
皆さんを騙しました

ごめんなさい...

ごめんなさい...」

「何を言っているの
君は騙してなんかいないよ

僕はお金は後から持ってきたらいいからね... と いったんだよ

だからずっと待っていたよ

ほら 君が くるまで」

お母さんがココアを 運んできました
「この子はね ずっと あんたの 体を 心配していたんだよ
ひどい目に あっていないか

ただ それだけをね

それにね あんたが いなくなってね
よく わかったんだけどね

私達は あんたが ずいぶん 好きに なっていたんだねえ

寂しかったんだよ

あんたの 顔を みれないとねえ (=^▽^=)」

お母さんと 息子は 笑いました

「おばさん 本当に すいませんでした
これ... あの時の お金です。

遅くなって 本当に すいませんでした」
若者は 深く 頭を 下げました

お母さんとお父さんは 頭を さげて 受け取りました

「この子はね お金を 数えられなくてね
だからね おつりとか わからないんだよ

騙そうと思えば簡単なんだよ

お金は もう 払いましたよ
そうって 帰る人も いっぱいいるんだよ

でもね この子は 誰にも 騙されたとは思っては いないんだよ

誰が この子を 騙したと 思ってもね

この子は 誰にも 騙されたとは思わない

幸せな 子 なんだよ

そしてこの子の いうとおり ちゃんと あんたは お金を 払いに 帰ってきてくれたよ o(^▽^)o」

「ありがとう

本当に ありがとう」

お母さんは 若者を 抱きしめました

その次の日から お店の中では 若者が お客様に 元気に 「いらっしゃい」と言っていました

おしまい...

☆☆☆☆☆☆☆☆

「よかったあ～o(^▽^)o」

「やったあ～＼(^_＼)／」

双子は もう 大はしゃぎです

「なにが よかったんだい」

お父さんは 笑いながら 聞きました

「えとね

男の子が 若者になって 元気で いてくれたことしょ

それからね

ちゃんとお支払に きてくれたこと～」

と マリーは いいました

「わたしはねえ (^O^)/

若者になった 男の子が みんなの 家族になれたこと～

だって 毎日 お母さんの ココアが飲めまあす」

o(^^o)(o^^)o

「わあい～わあい～」

お母さんが タイミングよく ココアを お盆に 乗せて持ってきてくれました

「はあい お待たせいたしましたあ〜」

しばらく みんなは ふうふう しながら ココアを 飲みました

すこし 眠たくなりながら

マリーはお父さんに 尋ねました

「お父さん 息子さんの 病気は なおるかなあ〜 私 お祈りしようかなあ〜」

お父さんは お母さんと 目を合わせました

「お母さんに 聞いてみようかな 病気の 事はね ...」

お母さんは マリーを 優しい目でみて いいました

「マリーは 優しい子だね...

リスさんも 明日には 森に 帰れますからね...

あなた達のおかげで リスさんは また 元気に 生きることができますよ

ありがとう...

そしてね

命というものは とても 不思議なんだよ

世界の 全部の バランスを たったひとつの 小さな命が
になっていたりするんだよ

どんなに 小さな 命にも 大きな 大きな 役割があってね

その 役割が 終わるまで 命の 灯火は 消えたりは しないんだよ

そしてね 役割が きちんと 終わる時にはね きちんと 灯火は 他の 命に 引き継がれていくんだよ

だからね マリーの 命の 灯火は どこかの だれかの 役割を 引き継いで 頂いた 大切な 灯火なんだよ

ものがたりの

息子さんの 役割が きちんと 終わるまでは 息子さんの 命の 灯火は 消えたりは しないんだよ

そして きちんと 役割が 終わればね その時は

マリーは 心を込めて お祈りしてあげようね

次の 灯火に 引き継がれますように... きちんと 役割を 生きていけますように...

てね... (*^-^)*b」

マリーは 「はい... (=^▽^=) お母さんそうする 」と 言いました

そして ベティは

あらあら

ゆらゆらしていました

みんなは 笑いました...

白い犬も 微笑んでいるみたいに 双子を みていました ...

おしまい ...